岡山理科大学紀要 第39号 B pp. 39-48(2003)

英語叙想文の過去形について

河本　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2003年11月7日　受理)

概要

1) 日本語の過去形「た」について、単純に過去の事態を述べる（叙実）用法の他に、現在の事柄に言及する用法があり、それは「思い出し」、「発見」など話者の mood に関わる認知・情報処理プロセスである。
2) 英語において事実に反する仮定で使われる条件節の中の過去形なども、日本語のこの「た」の分析から得られた機能が基になっている。
3) 英語では、叙想を表わす条件節の中での過去形は、事実の反対を表わすことに固定化されているが、日本語はそうではない。これは語用論の分野の違いである。

［1］問題提起

これまで、典型的な叙想法過去の用法として知られていた、次のような文の動詞の過去形をどう合理的に理解すればよいか、長く疑問に思ってきた。

(1) a. If you did it, you would repent it.
　　b.もしもそんなことをしたら、それを後悔するでしょう。

面白いことは、英文に対応する日本文に過去形「た」が現れている点である。日英語の両方で同じ過去形が現れているからには、過去形が何か共通する基本的な役割、機能を果たしているに違いないと考えられる。この視点から、河本は以前この問題を取り上げ、その際、上のような過去形は動作が完了している段階を指し示すことにあると結論付けた。日本語の語感のほうからそのことを結論づけたわけである。そのことは今考えても大きく的を外れているとは思われない。しかし、それでは、次のような be 動詞の場合にどう理解すればよいか課題として残っていた。

(2) a. If I were you, I would not do such a thing.
　　b.もし私があなたの立場であったら、そんなことはしないだろうに。

この英文での動詞の過去形については、一般に次のような解説がなされるだけである。

叙想法の過去は、通例、現在時または未来時に言及する

なぜ過去形でなければならないのか、という疑問に正面から答える説明を河本はこれまで見たことがない。この小論においては、これらの例文に見られる動詞の過去形が、果たして日英語で共通の論理、原理で使用されているのか、もしそうであれば、それがどのようなものであるか、を突き止めることを目的とする。その際の手順としては、日本語で幅広い領域で現れる過去形に関する最近の研究をもとに、その同じ原理が日本語の条件文に、そして、英語の叙想文においても同様に働いていると見ることができるというものである。

ここで注目されるのは、日本語訳として次のようなものも可能であり、前の訳との違いがどのようにうまく説明できるかも、この原理の正当性を保証することになろう。

(1) c.もしもそんなことをするなら、それを後悔するでしょう。
(2) c.もし私があなたの立場であるなら、そんなことはしないだろうに。

我々日本人にとって英語の叙想文が難しいことは、日本人が書いた次の一節を見ただけでも一目瞭然である。これは書物として世に出ているものであるが、河本は批判するつもりで引用しているのではなく、英語の学習に関して述べていることとは言え、叙想文に対しどのように理解し説明すべきか、ということを考えさせてくれるものとして引用した。

･･･仮定法の文では、**動詞の形が過去時制になる**のに、それを、「現在の時点で仮定するのだ」とい

うことが、なかなか分からないようだ。一番、簡単な例をあげて説明しよう。

② If you **study** hard, you **will** pass the exam.

「もしあなたがもっと勉強するならば、あなたは試験に受かるでしょう」

この文は、仮定法の文ではない。断じて、そうではない。If 節中の動詞は study と現在形のままであり、うしろの文（主節）の方は、will がついている。この②も、「ただの条件の文」であり、「直説法・現在」の文というのである。

～～途中略(河本による) ～～

③ If you **studied** hard, you **would** pass the exam.

「もしあなたがもっと勉強**するならば**、あなたは、試験に受かる**だろうになあ**」

これが、仮定法である。If 節中の動詞が、studied と過去形になっているので、「仮定法・過去の文」というのである。ところが、この「過去」は、日本語では、**「現在」の時点で訳さなくてはいけない**のである。現在の時点での日本語にするべきなのである。だから、「あなたが勉強したら」とやってはいけないのであって、厳密に正確には、「勉強するならば」としなければならないのだ。ここが、日本人の英語学習者が、つまずく点であろう。日本のほとんどの参考書と、英文法書が、この点を実にいい加減にして、「勉強したら」と書いている。これで、訳文としては一応間違いないだろうが、それでは仮定法の命（根本）が分かったことにはならないのだ。これで、後述する「仮定法・過去完了の文」との区別がつかなくなってしまうという別の欠点もある。「もっと仕事（勉強）をしたら」の、この「仕事（勉強）をしたら」を「仕事（勉強）をするならば」と、言いかえなければ、英語の仮定法が分かったことにならないのである。（波線は河本による）

ここでこの著者が強調している重要な点（河本による波線部）を、この後で完全に否定することになる。

［2］英語の条件節に現れる過去形

細江においても、叙想法過去の文で、その中の過去形というものの本質が何であるかを考察しているところは、河本の見る限り、ほとんど見当たらない。その用法を分類してはいるが、それと叙実法の過去形との共通性など全く触れていない。これが不思議でならない。なぜ叙想法過去形が条件節の中でよく現われ、しかも典型的には現在の事実の反対を述べるのに使われるのか、という点であるが、それには細江をはじめ、これまでその合理的な説明を目にしたことはない。

しかしながら、細江は叙実法過去の機能・用法に関して次のような鋭い分析を行っている。河本には極めて重要と思われるので、少し長いが引用することにする。

上記の場合に、叙想法の代りに叙実法を用いることは、かなり古いころから行われたことであり、また、近世英語では were 以外の動詞には、叙想法と叙実法との間に形態上の区別なく、その両者の差別を示すものとしてはただそれとともに用いられる帰結文句での動詞の形態がありうるだけで、しかもその間になんらの不都合を生じないのが普通である。してみれば、ただひとり were においてのみ叙想法が必要であるという理由はないはずである。そして、その初め、なぜこの両叙法の語形上の区別がなくなりだしたかと言えば、そこには従来も説かれたように音韻変化の結果、両者が合流するに至ったことも確かに否めないところであるが、それでも不都合を生じなかったのは、一つには前にも言ったとおり、叙実法と名では言っても"Past Tense"というものは非経験な事柄をも陳述する力を有し、叙想法と区別しにくい点をその職能の一面に持っていたからであることを認めなければならない。もしこの事情がなかったならば、「叙実」・「叙想」の両法の区別が語形上に明示されている動詞の場合に、叙想法の代りに叙実法の用いられることはなかったとまでは言えなくとも、あんなに普遍的にはならなかったであろうと思われる。しかし、近世における叙実法優勢の現象は、これだけで全部説明し尽くせるものではない。学者はぜひとも言語使用者の考え方の変せんに着眼すべきで、それはすでにいわゆる Subjunctive Present の場合にも言ったように、近代人の頭の働き方が、昔の人の場合よりも著しく具体的考察を選ぶようになったという事情も大いにあずかって力あるものと見なければならない。Jespersen はこの場合 was のほうがしばしば were よりも強勢的であるように感ぜられると述べ、若干の例をあげているが、その場合に関する私の考える理由はすでに § 34 の場合にも述べたとおり、was に強勢を加えて用いれば（強勢を加えねばその効

果は were と変わるところがない)、ある事柄を単純な一個の仮想としてではなく、ひとまず既定の事実であるかのようにみなし、そこに少なからぬ思想の低回をもって話を進めるたてまえになるからであると見られる。(pp.166-8:細江)

この引用の最後の部分が特に強調したい点である。河本が以前の考察において、英語の叙想法に関し、動詞が過去形で動作を表す場合、「完了」のようなものを表すと結論づけていたことを含むものである。細江は、強勢を加えた叙実法の過去形 was にだけこの原理を認めている。なぜ、強勢がない場合や叙想法の過去形の場合にも、強弱の差はあれ同じ原理が働いている、と認めなかったのか不思議である。英語の条件節の中で動詞の過去形を使った叙想文の場合すべてに、細江が述べているこの基本原理が共通に働いていると考える、というのが今回の河本の結論の１つである。この根拠は、１節で挙げた日英語の例文から分かるように、現在の事実の反対を仮定する文において、日英語ともに過去形が使われるからである。つまり、過去形というものに、人間の共通した認知・情報処理プロセスが働いているからである。この結論は、次節で扱う日本語の過去形の分析から支持・納得されるものであると分かる、というのが本論の主旨である。それほど日本語の過去形の働きには驚かされることになる。そして、同じことを表すのに２つ以上の表現があれば、分化（棲み分け）ができニュアンスの違いが生じるのは当然で、日英語で違いが生じるが、そのことは語用論的な違いと見ることができる（これは４節で扱うことになる)。

叙想法の過去形が時を示すものではないことは既に指摘されている。Onions は、英語の叙想法の使用について、次のようにまとめている、

153.叙想法の現在と過去は、通例、現在時または未来時に言及する:

Long *live* the King!（国王万歳！）

～～他の例文省略（河本による）～～

154.しかし、叙想法過去も、過去時制に照応しているときは、過去時に言及することがある:

She looked as though she *were* fainting. (p.220: Onions)

このことから、叙想法過去が時のための道具である、ということではないことが感じ取られる。しかし、なぜそうなのか、という原理の説明は全く述べられていない。細江も、叙想法の tense について次のように述べているが、叙想法の過去形自体の機能、原理を考察してはいない。

･･･Tense は本来「時」ないし「時の区別」を表すのでないことを論じたが、ことに叙想法に "Present"; "Past"などということを言うのは、ただの名としてはどうでもいいことではあるが、実は全然意味をなさないことで、そのいろいろな語形は「時」とは無関係の存在である。ゆえに、"Subjunctive Past"は「現在」を表わし、"Subjunctive Past Perfect"は「過去」に関する陳述の用具であるなど言うものがあったら、その説は単に常識的に考えて奇怪な説であるばかりでなく、言語の実際に照らしても全然無意味である。(pp.163-4:細江)

確かに言われるように、叙想文で過去形や過去完了形が現実の時を示すものであるといえば問題があり、時そのものを表すものではない、ということに同意せざるを得ない。しかし、そこには、この節の最初に引用した細江の一節の最後に書かれているように、叙実法の過去形では、時そのものではないが、「既定の事実であるかのようにみなし」にあるように、時表示に関連しているような機能が働いていることが伺われる。これが何なのか、その作用原理が何なのかということを問題としたいのである。このことを明らかにしてくれるのが次節の日本語の過去形の分析ということになる。

ここまでのまとめとしては、

日本語において、叙想文での過去形は、現実の時を直接指し示しているのではなく、時に絡んだ発話者の認知・情報処理プロセスを反映すものである！

ということになる。英語の条件節などでの叙実法過去及び叙想法過去が日本語訳の中の過去形に対応することがあることを１節で確認した。そして、日本語においては、動詞の過去形は唯一であり、叙実・叙想で異なった形態は使い分けてはいない。この節で、英語条件節などの叙実法過去形が時を表しているのではなく、何か時に絡んだ認知・情報処理プロセスとして働いていることを考えると、この同じプロセスが、日本語の条件節に現れる過去形についての分析結果とうまく符合するか、それを見るのが次節ということになる。その結果として、英語条件節などに現れる叙実法・叙想法過去には、共通の基本原理が働き、そして、それは日本語条件節の過去形とも共通していると結論付けることが妥当であると考えれる、というのが本論の新たな主張である。これらのことがまとめて理解されるほど、日本語の過去形「た」の分析は示唆を与えてくれ

る重要なものであると河本には思われる。

［3］日本語の「た」の役割

河本は、日本語の文法を積極的に考察してきているが、最近、日本語の過去形の用法に関する研究が進んでいることに驚かされた。日本語は河本の母語であり、過去形について、その使い方は分かっているものの、その背後に潜む論理・原理までは理解していなかった。それが納得いく形で次のようにうまく分類されていることが分かった（河本による部分的引用）。

確認

先生の家に電話あったかしら／火星に衛星あったっけ／明日授業あったかしら／あなたはどなたでしたか

想起・発見

そうだ、今日は日曜だった／「先生、火曜日はいかがでしょうか」「火曜日ですか。ちょっと待ってください、手帳を見ますから･･･あっ、火曜は駄目です。授業がありました」

驚愕・驚嘆

まあ、呆れた／こりゃ、驚いた (p.281: 森田)（下線は河本による）

これらはすべて現在の状況について述べたものでありながら過去形語尾「た」が使われている。井上はこの場合の原理を次のように分析している。

発見の「･･･タ」も、思い出しの「･･･タ」も、「･･･タ」そのものは発話時以前の状態であることを表すだけであり、「発見」「思い出し」という意味は、当該の状態を過去のある時点にさかのぼって把握することから付随的に生ずるというわけである。(p.137:井上)（下線は河本による）

河本は、この小論に取り掛かる少し前に、以上の分析を目にしたが、すぐにこの「た」の使用の原理が、長い間探し求めてきた日本語条件文の中に現れる「た」であることに気づいた。そして、この小論をまとめている中で、条件文の中に現れる「た」も次のようにすでに触れられていることが分かった。

仮定の事項を述べる「･･･とする」、「･･･と仮定する」の補文には、しばしば「･･･タ」が用いられる。

(a) 今ここに100万円あったとします。あなたなら何に使いますか？

(b) X と 2X との間に1対1対応があったと仮定せよ（とカントールは決まり文句で言った）。

仮定の事項を述べる「･･･とする」、「･･･と仮定する」の補文には、しばしば「･･･タ」が用いられる。この種の「･･･タ」も、発見の「･･･タ」と類似の現象として位置づけられる可能性がある。

(c)（ここは現実世界とは別の世界であると思った上で、あらためて見てみたら）今ここに100万円あった、とする

(d)（そんな方法があるかどうかはわからないが、仮にある方法で調べてみたら）X と 2X との間に1対1対応があった、と仮定せよ。

というニュアンスで用いられる。現実世界における状態とは別に、ある仮定のもとで観察された状態を独立に叙述することで、「現実世界とは別の仮定の世界での話である」ことをより鮮明にするわけである。(pp.145-6:井上)（下線は河本による）

日本語では、過去形として、（叙実法と呼んでよいと思われる）1つの形態が存在するだけであり、それを叙実にも叙想にも使用しているわけである。考えてみると、動詞以外のところで叙想であるかどうかを判断しているわけである。そして、そういう状況の中で、過去形を用いること自体が、「過去のある時点に遡って把握する」という基本の働きが基になって、そこから**仮定としての話を鮮明に想起させるように働く、と理解される。仮定の話を想起させるというのは、いわば二次的機能と考えることができよう。「発見」、「思い出し」といった機能が働く結果として、仮定の話であるということが強調されるわけである。**こう考えると、これが正に英語での叙想の文にも当てはまると考えるられる。それは細江が叙実法の条件節に使われる場合に考察していること（［2］節で引用したもの）と、言い回しは異なるが全く同じことを言っていると河本には思われるからである。すなわち、日英語ともに、叙想での過去形は、動作や状態を本当に起こったもの、存在しているものとして「発見」的、「思い出し」的にできるだけ現実のものとして想起してください、という役割を果たしている。

こうすれば、1節で取り上げた be 動詞の例文の理解も見えてくる。すなわち、条件節の中では、動作ばかりでなく状態を示す動詞においても、過去形であることから「発見」、「思い出し」のプロセスが働いて想起

が強調されている、ということである。井上の次のまとめは、このことが英語の叙想文の場合にも同じように当てはまることを示していると思われる。

a)「タ」は「発話時以前の出来事・状態である」ことを表す。

b) 日本語では、発話時以前のある時点で観察された（発話時以前に認識すべきだった、発話時以前に体験された）状態 p を、発話時における同一の状態 p から切り離して独立に叙述することが容易である。

という二つのことがあわさって、「発見」、「発話時以前の認識の修正・補強」、「隠していた正解を明かす」、「思い出し」といった様々な意味が具現化される･･･（p.153:井上）

条件文を含む一般の複文における「た」の働きに関し、森田も的確に分析し、同様の結論に達しているので、それを次に引用しておく。

確述意識の現れが「～た」の本質だとすると、述語が複数回現れる文脈でも、その文脈の中でそれぞれ叙述する事象が間違いなく成立したとの認識に立って、話の筋をさらに先へと進める意識となる。したがって、叙述するその事象が、その段階で過去の扱いになるということでは全くない。また、よく言われているような、「～た」の段階までに述べられた事態が時間的に先行して、それの成立を踏まえて、その後に起こる事象を以下に続ける「以前／非以前」「了／未了」の順序で文脈が展開するというのも、多くの例では確かにそうだが、絶対的なものでもない。すでに述べたように、「～た」の本質は話者の認識の有り様を文脈に添えるものであって、“確述”なる名称を与えたのもそのことを踏まえている。決して時間観念の上に立って過去か否かを弁別する働きではないのである。文脈内のその個々の事象に対し、その文脈内の時点において“確かなもの”とその折々に判断を下し進めていくだけで、だからと言って、たまたま先に叙述した事象が後の文脈で取り上げる事象より時間的に先行しているという理由は一つもない。(pp.281-2: 森田)（下線は河本による）

河本の結論としては、日本語の「た」形式は過去を示すという最も基本の機能が基になっていて、そこからここで言う「確述」の機能が生じ、そのことは英語の条件節の中の過去形の使用と全く共通しているということである。従って、細江が tense のところで述べた、叙想法での past などというのが、時とは無関係の概念である、というのは、いわば外に対しての見え方（用法）を述べているもので、内部（原理）的には、時に関する認知・情報処理プロセスが働いている（「発見」、「思い出し」といった個人の認知・情報処理が働いている）、と言い直すべきだと考えられる。これで 1 節で取り上げた英文の訳が複数存在する場合でも、それらの違いがどういうことかも分かってくる。過去形を使った訳には、確述プロセスが働いているわけである。ただし、条件節の中での日本語の過去形と英語の過去形はこのように同じ原理に基づいているとするけれども、その最終的な語用論的機能においては、明確な違いが存在する。そのことは次節で扱うことにする。

以上のまとめとして、日本語の「た」の分析結果を用いると、英語の条件節の中に現れる叙想の過去形が、日本語と同じように、しかも合理的に説明できることが分かった。ただし、このことは、日英語において条件節の中で使われる過去形の働き、機能がすべてにおいて同じであると言っているわけではない。その違いは語用論的な違いで次節で考察される。

ここまで分析が進むと、細江が叙実法過去について述べた次の一節がすんなりと理解できることが分かる。ただ、引用の先頭部分の『“Past Tense”の本来の意義は「過去の時」を表わすものでない』に関しては、既に述べたように、河本は同意できない。時の表示機能から叙想用法が生じているという立場だからである。

次に、私が昨年の小著で、“Past Tense”の本来の意義は「過去の時」を表わすものでないことを示す一つの場合として指摘した

Faint heart never *won* fair lady.（だ夫で美姫を得るものはない）

～～他の例は河本が省略～～

のような、言者の思想の低回によって情緒のこまやかさを見る場合は、これを一面から観察すれば一種の伝承事項であって『なるほど何々であるわい』・『やっぱりそうだなあ』といったような意味をなす用法であり、それが自己特発の所感に関して現われると、これも昨年の小著に指摘した

Tot *was* mother's darling!（おおかわいいものを）

I *thought* as much.（そのくらいのことだと思った）

のような日常所用の語となる。これらを、昨年も指摘した北欧諸国語で規則的に用いられる

～～例は河本が省略～～

などや、あるいはわが国語の

父上よけさはいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

などの「けり」の用法や、日常語の『ありがとうございました』・『困ったなあ』・『こりゃ驚いた』・『今度の上りは何時でした』・『さあ、何時だったっけ』などに引き比べて考えてみたならば、ここに初めて"Past Tense"が、通常これまでの学者の考えていたように「叙実」の力を有するばかりでなく、その半面では実に強烈な「叙想」の力を有するものであることが了解できるであろう。一度、その本質をは握し、その「叙想」の力を確実に認識したならば、近世の英語でいわゆる Subjunctive Past が衰え、叙実法の"Past Tense"がこれに代わる傾向が著しくなった有力な一原因が会得されるであろう。(pp.48-50:細江)(下線は河本による)

本論1節の細江の引用にある「思想の低回をもって」や今回の引用の「思想の低回によって」という部分が、この節で述べてきた「発見」、「思い出し」という認知・情報処理プロセスに相当するわけであるが、このことによって初めて誰もが納得できる。細江はその部分に関して分析しきれていなかったと河本は考える。そうであっても、細江がここまで考察、推察していたことは、今回初めて理解したわけであるが、全く驚嘆させられるものであった。

事実でないことを仮定するというのは、各個人が持っている、事実からなる個人の知識体系 K が存在し、その外に位置する発話(すなわち叙想文)を K の中に仮に認めようとするもの、と理解される。それは「思い出し」、「発見」ということの言い換えであるが、このプロセスが叙想において過去形が使われる基本原理である。すなわち、過去形の分析から、人間の認知・情報処理プロセスの日英語で共通した部分を確認することができたわけである。

[4] 日英語で条件節などに現われる過去形の語用論

日本語においては、条件節の中に「た」が現れる場合、それは事実を叙実的に述べているか、非現実の出来事・状態などを想定(「発見」・「思い出し」による)して述べているかのどちらをも表わしうる。その区別は文脈や副詞などからなされる。日本語条件節の中では「た」形は極めて多用されるが、英語のような事実の反対を表す、というようには固定化されていないことが特徴的である。「た」が過去の時を示していないとき、「た」自体の基本の役割は、動詞の表す動作・状態を過去に遡って認識することである(前節)。しかし実際には、前置された条件節が言われている段階では、事実か、あるいは想像上のことか、どちらかはっきりしないこともある。

英語でも、叙実法の過去形の場合、それが条件節の中に現れると、日本語と同じで事実か想像上のことか両方の可能性がある。ただし、日本語とは大きな違いが存在する。それは、英語では、叙実法及び叙想法の過去形により、「発見」、「思い出し」の認知プロセスが働く場合には、必ず非現実のことを述べている、という点で、それは日本語との著しい相違点になっている。この原理は、これまでのことから次のようにまとめられる。英語では条件節に叙実法現在形を用いた単なる仮定を表す表現手段があるが、それと平行して叙実法、叙想法の過去形を用いた(日本語の「た」文と同じ)叙想を表わす表現が存在し、その結果、棲み分けとして、事実の反対や可能性の低いことに対してのみ過去形を使うというふうに固定化している。つまり、語用論的な点で日英語で違っているということである。英語では、非現実のときに使用する叙想法がほとんど叙実法に取って代わられたことを考えれば、その差異は当然と考えれる。

事実の反対ではなく可能性の大小が叙想の過去形に著しく関わっている場合があることを理解する例として、次のものを引用しておく。

If you go to England, where will you live?

といえば、相手がイギリスへ行くことはかなり確かだという状況での会話である。これに対し、次の例は宝くじを買った直後の当たるか当たらないか分からない段階での会話である。

A: What would you do if you won?

B: I'd invest the money and live on the interest.

これはほとんど夢の話である。

次のは車を買おうとしている人(既婚者、子供あり)と友人 A との会話である。

A: Have you decided which car to buy?

B: No, not yet. Personally I'd like the Mercedes, but on the other hand *if* we *bought* the Volkswagen

van, we'*d* able to take all the kids on holiday.

と迷っている状態だったのが、1週間後には別の友人Cと、

C: Have you decided which car to buy?

B: Yes, we're going to get the Volkswagen van.

C: Oh really, why?

B: Well, *if* we *have* the van, we'*ll* be able to go on holiday together.

ということになるかもしれない。何を買うかまだ決まらないときには仮定法過去を使い、もう決まったときには仮定法過去は使わない。(p.222:ソーシャルスキル)

過去形であることから来る基本的役割は、事実の反対を想起する場合と同じ原理に基づいていると考えられる。実現の可能性の低いものにもこのように過去形が使われるということである。これは、英語特有の情報処理の仕組みであり、動詞の形で発話者の考えている可能性の大小が言い分けられるのは便利なものといえるかも知れない。

日本語の叙想において、過去形が表わす時に関しては、次に示すように自由である。

(4) a.もし東京へ行ったら、このバッグを買ってきてください。(下線部は未来)

b.もし東京へ行ったら、そのことにクレームがついていただろう。(下線部は過去)

日本語では、過去の事実の反対を明示するときには、副詞など語(句)あるいは「～していたら」のような形で過去時を基準にした表現も可能である。しかし「～していたら」という表現も絶対的ではない。例えば次のように。

(4) c.もし東京へ言っていたら、その時点で出張費は4万円少なくなっているであろう。(下線部は未来として可能)

英語では、過去の時を基準にしている場合、それは動詞の時制でほとんど分かるようになっている。それは、過去完了形により、ある過去時を基準にした述べ方ができるようになっているからである。これらのことから、動詞の時制に関して、日本語は英語より"想定"という mood を表わす機能が強い、勝っているということができよう。

このように見てくると、英語では、叙想において叙実法の過去形の機能が増加しつつある、という言い方には賛成しがたい。河本としては、叙実法過去形の使用領域が叙想の場合にまで広がっている、ぐらいに言いたい。英語では叙想法という特別な語形はなくなりつつあるが、日本語と同じで、叙実法がその使用領域を広げつつあるということである。叙実法でも叙想法でも、その過去形ということから来る基本的機能が同じだからそれが可能になったといえよう。そういう意味で、日本語は英語の向かっているいわば究極の姿と見ることができるかもしれない。この英語の変化に関して、Onions は次のように述べている。

近代英語においては、叙想法の用法は、古い時代の英語の用法と比べても、また他国語のそれと比べても、大いに制限されている。OE における叙想法の領域は、ラテン語や近代ドイツ語とほぼ同一であった。OE および ME では、いや、エリザベス朝時代に至るまでも、その用法は、きわめて自由で、動詞に事実を含意させるつもりがない場合、あらゆる種類の従節に用いられていたのである。単文や主節においても、その用法にはなんらの制限も課されていなかった。ところが、今日では、ある種の節、およびある種のきまり文句にしか使用されない。

OE は、はっきりと事実を表していないあらゆる従属陳述において叙想法を必要としたという点で、他の多くの外国語とは異なっている。(pp.210-1: Onions)

このように、叙想法の使用範囲は制限されてきている。事実の反対を想像するときにも、文脈や文中の副詞などからそのことが分かれば、叙実法と異なる語形変化としての叙想法がなくても不都合はないと考えられる。すなわち、叙想法という動詞の形は、余分なものになりつつあるということである。河本には、英語の歴史というのは、様々な点で冗長なところが簡略化される過程のように写るが、叙想法の衰退もその1つと見られる。この小論で主張してきた重要なポイントは、英語の叙実法、叙想法はともに、それらの過去形というものの基本的役割、即ち、認知・情報処理プロセスの点で互いに共通しているということである。従って、過去形を用いた条件節が、叙想と叙実のどちらに使われているかは、日本語のように文脈や副詞などが決めればよいのである。また、ある過去の時を基準にした想定であるかどうかという点も、主に文脈が決定する、という仕組みでもかまわないわけである。日本語でもそうなのだから、混乱は生じないといえる。

細江は I wish に続く部分に(叙実法)現在完了形が用いられているものが、少ないながら存在することを

指摘している。これは、河本が叙想法過去をかつて「完了」の意味と理解していたが、それが表層的にも「完了」を表わす（叙実法）現在完了形で示されているわけで興味深い例であるといえる。

a) He is certainly bewitched: I wish the old hag upon the green *has done* him no mischief.
（彼は確かに魔法にかかっている。あの緑野の老婆が彼に害を加えたのでなければいいが）

b) "Grumbler? Not I," said Peterkin; "what pleases other people, will always please me. Only I wish we *have* not got King Stork, instead of King Log."
（･･･ただ、欲のまちがいになるようでは困ると思うだけでございます）(p.109:細江)

"I wish"の箇所はそれに続く従属節が叙想であることを明示しているわけで、その叙想の内容部分で叙実法現在完了が使われていることから、事実の反対を述べているものではない、ということが今の段階では河本にも容易に理解できる。Onions は叙想に関し、「現在完了と過去完了は、それぞれ、普通の意味を持っている」と簡単に述べているが、正にこのことを言っていると考えられる。事実かどうかの判断は、文脈や副詞などから行うことができる場合が多いといえようが、英語では、ある程度、動詞の時制でそのことが簡単に示せるようになっていて、明瞭かつ簡潔な表現が可能であるといえる。今の場合、動作の［完了］であるが、その「完了」といえども、単純な現在形による場合と同じように想定されているに過ぎない、と考えればよいだけのことである。事実の反対を想定しているのではなく、３節の言い方で言えば、認知・情報処理プロセスは全く働いていないということである。

［５］主節に現れる would などの過去形

主節に現れる would などの叙想法を最後に取り上げる。このことに関し、歴史的な経緯を見ておくことが必要であろう。

> この過程をさらに助長したのは、従節において、単一叙想法の代わりに、*may, might, shall, should* を一般的に用いるようになったことであった。たとえば、lest he die の代わりに、*lest he may die* または lest he should die とするがごときである。実を言えば、これらの助動詞は、それ自体、起源的には叙想法であるが、今ではある程度叙想法とは感じられなくなっているし、他方、形式的にも、叙実法と区別すべき点がなくなってしまっている。(p.211:Onions)

英語において、条件節と共起する主節の中で（助動詞の）叙想法過去形がよく出てくる。細江は、この過去形の機能を次のように述べている。

> ･･･前節に説いた形式の帰結文句の中のある物は、その前提たる条件の意識が弱められ、ついに喪失し終わる結果として独立の地位に上ったものがかなり多くある。こうして独立した文は常に直言を避けて一種の穏やかな、遠慮的な、または丁重な心持ちを伴う文となる。たぶん、言外に何らかの条件をひそめているからである。(p.242:細江)

この捉え方は面白そうで、叙想文が、条件文と帰結文とが元々１セットであったような文であれば、なるほどとうなずける。このような would が帰結文句の中によく現れるというのもそれで分かるが、やはり would のような叙想法の過去形の持つ意味を正面から考察しているとは言えない。単に条件節との関連を述べているに過ぎない。そして、条件を考えようがない場合も多い。河本も、これまでこのような主節での過去形について、それが持っている意味以外にはあまり考えようとしたこともなかったが、条件節の中の過去形が、以上のようにうまく説明できるとなると、この場合の過去形も気になってくる。このように考えてみると、すぐに思い出されるのが Can you と Could you の違いで、後者が叙想法過去形であることから丁寧な依頼になるというものである。従って、目上の人などに対してはどちらかと言えば Could you の方を使うべきであるとよく聞かれる。このことの理解に関係していると思われる動詞一般の叙実法過去について取り上げてみよう。

まず、叙実法過去形が現在の事態について述べられ、それが丁寧さを出す場合が知られている。新英語学辞典の中で次のように述べられている。

> Did you want to see me?は時制に関係なく、Do you ...?よりも多少丁寧な表現で、話者の心的態度も作用している。(p.1241:英語学辞典)

しかし、なぜ、そうなるのかということを解明する必要がある。その解明には、次のことが関係していると考えられる。

> おもに口語で過去時制が現在時を表すのに用いられることがある。I hoped, I thought, I wanted, I

wondered などの形式で依頼や勧誘を表すときによく見られるもので、遠慮した丁寧な言い方である。

過去時制を用いることにより、いま述べているのは過去に達した結論であって、現在の態度は未決定であること、相手の態度によっては自分の態度を変える用意が十分にあることなどが表される。

a) "I *wanted* to talk to you briefly about one of your patients," Jack said. "My patients' conditions are confidential," Dr. Levitz said, as if by rote.

b) "And I *wondered* – I *wondered* if I could buy you a drink or something."（中略）"Shall I meet you somewhere?" Mrs Robinson said. (p.34: 柏野)（下線は河本による）

この手法は日英語共通の用法であろう。河本としては、叙想法過去形が主節に現れる場合、この原理が常に働いているのではないかと考えるものである。これには、条件節の考察の際に言った、「発見」、「思い出し」といった認知・情報処理プロセスが働き、それが基になった丁寧表現と見ることができるのではないか。従って、よくある過去形の条件節と助動詞の過去形の主節からなる叙想の文では、その両方ともが２，３節で述べたと同じ原理が働いているということになる。強いてその点を強調して日本語に直すとすれば

(5) a. Could you ...
b. ...して頂くことができるのでしたかね

(6) a. I would ...
b. ...するつもりだったのだが

つまり、主節に現れる助動詞の叙想法過去形は、元々叙想法ということで推測や丁寧さを出しているが、さらに、過去形という認知・情報処理プロセスの介入で丁寧さを増加している、というのが河本の到達した一応の結論である。誤解してはいけないのは、発話の際、このような「発見」、「思い出し」といったことは必ずしも意識に上るものではないということ。言語の使用段階での意識にすべてが反映されるというわけではない。

1. will は、話者の、文の内容に対する不確さを表すという意味で Onions も言っているように元々叙想法動詞形である。

2. それが過去形として使われているということで、現在も含めて常にそう思っているというのではなく、思い出せばそうだった、そういうことに気づいた、というプロセスが基になっていて丁寧さが増した表現になっているということである。すなわち、相手に対する遠慮という要素も出てくることになる。

参考文献

1) C.T. Onions "An Advanced English Syntax"（安藤　貞雄訳）文建書房　1969
2) 井上　優　「現代日本語の『タ』」（「『た』の言語学」）　ひつじ書房 2001
3) 柏野　健次 「テンスとアスペクトの語法」　開拓社　1999
4) 河本　誠　"接続法の時制について" 広島文教女子大学紀要第２３巻　人文・社会科学編 1988
5) 鶴田　庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン　「英語のソーシャルスキル」大修館　1988
6) 細江　逸記 「動詞叙法の研究」　篠崎書林　1973
7) 新英語学辞典　研究社 1982

On the past tense in English Suppositional Sentences

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan
(Received November 7, 2003)

If the past tense is used in a conditional clause in English to suppose an event or state which is contrary to an actual event or state, the past tense functions to make people take the content represented by the clause as real only temporarily in the mind in the course of a speech or narration. We show that this function can be found to work in both the indicative past tense and the subjunctive past tense in English. Then we propose that this function is based on its more basic function of "finding" or "remembering." This more basic function has already been derived from the analysis of some uses of the Japanese past tense, but is confirmed, in this paper, to be also applicable to the analysis of the English past tense. There is, however, a difference of pragmatics between Japanese and English conditional clauses: if this more basic function works in a clause in English, then the clause is always meant to suppose an imaginary event or state.